

# 庄内協同ファームだより

No.129 2009年5月号



発行/  
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338  
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140  
http://www.shonaifarm.com



じゃがいも掘り農業体験（本人は後列右はじ）

## ふれあい

農業に就農して5年がたつ。1、2年目は憶えることが多く、ただ農作業をしてきたという感じだったが、今は地元の産直や朝市、学校給食への野菜提供、子供達との試食会に参加して消費者と交流する事に楽しさや喜びを感じている。

昨年は我が家の農産物を利用してくれるお客様を対象に『じゃがいも掘り農業体験』を開催。10名が参加

してくれた。大きな

じゃがいもが出てくるとみんなにみせび

らかし走りまわる子供や、暑さと疲れに

まいってその場にしゃがみこむ大人もいる。休憩時は隣の桃

畑から実を穫り喉を潤し、「木に生って

る桃を見たのは初めて。桃は柔らかい果物だと思っていた。」と初めて桃の木を見て感動してくれた人

もいた。

今年も「育てるから始めよう。チャレンジも栽培」と題し桃の生産者を募集。植える場所や機械、

技術を提供する代わりに山仕事を数日間労働奉仕する事が条件。地元のお客さん2名が参加してくれた。

たった2人？・・・と思うだろうが参加者ゼロと思っていた私にとっては大成功の企画であった。

今まで「安心、安全、美味しい農産物作り、天候に左右されない安定収入」を自分の理念としてやってきたが農業体験や現地視察などを通じ、生産者消費者との垣根を越え、農産物を供給していくという

意味を込め「食の輪、絆、礎を伝える」というのを理念の一つに加えて今後の農業に取り組みたい。



石垣忠彦

# 組合員 訪問

その20

工藤 広幸 さん

稲作と花、シイタケの大規模複合経営で農業と生活を楽しんでいる工藤広幸さん。アイガモ農法を始めてから、農業に対する考え方が変化したという。

## 時間のゆとりがあり、束縛もされない働き方に満足。

収益性だけでなく、「癒し」の効果を実感している。

大規模複合経営はいつから

もともとは水田三・五畝だったが、平成元年に一・六畝を購入して規模拡大を図った。同八年にハウスでのストック栽培を導入。さらにストックが空く時期にトルコキキョウを植えるようにした。そうすると忙しくて、妻と父だけでは回れなくなり、私も仕事をやめて農業に専念することになった。

その後は、ストックだけの冬場が暇になり、シイタケを始めた。シイタケは今年で四年目。長男も戻り、跡を継いでい

る。

父がいたこともあり、長い間、夫婦二人とも会社勤めをしながらの兼業農家だったが、将来のことなどを考える中で専業農家を選択した形。花を始めた時は農協の育苗センターがオープンして、花栽培に力を入れていくところだった。シイタケは中国産の輸入が急増し、国内での生産にここ入れが必要になった時で、シイタケ栽培に関するさまざまな研修や助成があった。

いつも、ちょうどよい具合に波に乗って進んでき

たと感じる。

波に乗る秘訣は

情報収集が大切。花を始めたのも、会社の仕事で農家を回っていると、稲

作農家は暗いのに、花農家は活気があった。現場の違いを肌で感じて、花農家は収入が上がっていると確信した。

花やシイタケに取り組んでいるよい先輩に恵まれたことも大きい。

水田も一四畝ある

花農家は家族で農業に従事しているため、その人手を当て込んで、耕作できなくなった農地が集まってくる。もともと

拡大志向だったのだと思う。

新しいもの好きで借金も気にしない。大きい機械に乗りたいたいと思ったら、規模拡大するしかないというのもある。

大規模を有機や特別栽培するのは大変では

減農薬無化学肥料（減無）の特別栽培はそれほど難しい。ただし、庄内協同ファームの減無は、農協の減無より

基準が厳しく、通常の栽培基準の五分の二の農薬成分しか使えない。有機では当然だが、雑草と格闘している。除草のためにパートの人を雇ったりもするが、アイガモ農法を始めて今までにない癒しを感じている。



アイガモを始め二年目は、水田に放したヒナがガラスに狙われて大変だった。朝から晩までガラスを見張った。去年はヒナを放した直後に低温と東風にやられ、体力の落ちたヒナが水田の真ん中で溺れて死んだ。あわててヒナを補充したら、イタチかハクビシンかに狙われた。

水田の周りにケモノの進入を防ぐ電気線を巡らせてヒナを守った。そんなこんなでアイガモはかなり経費がかかり、割に合うのかと考えると悩むところだが、朝

水田に行くヒナが寄ってくる。収益性だけではない判断でアイガモ農法をやめられずにいる。

家族全員で働く楽しさ

東京でコンピューター関係の仕事に就いていた長男は、夜も寝ずに働く日々で給料はよいが体を壊して終わるのではないかと、将来を考えていた。今は家族三人で農業をしながら、時間のゆとりがあり、束縛もされない働き方に満足している。

一方で、農家だから収入が少なく、生活が苦しいというのは嫌だから、収入を上げる努力をしてきた。複式簿記を付けていることで経営状況がよく分かり、将来展望も描きやすい。

最初に複式簿記を付けた時は、初めて自分の懐をのぞいて赤字を目の当たりにする。複式簿記をできない人はその時点で嫌になるという。自分の懐を大っぴらに出せる人は他の人の助言をもらったり、指導を受けたりできる。それが経営改善につながる。

プロフィール

工藤広幸五九、妻ひとみ五七、長男祐生二九

庄内町赤洲新田

経営規模「水田四畝（でわのもち、コシヒカリ）、  
くばS.D.I. はえぬき、ササニシキ、ひとめぼれ（うち二〇畝）有機二畝、特別栽培八畝」を協同ファームに出荷。花ハウス七棟、ストック、トルコキキョウ、カスミソウ、シイタケ万四千床（ハウス三棟）  
趣味「夫妻でいくドライブ、旅行など。先日は津軽三味線の吉田兄弟のライブに行ってきた

低温焙煎麦茶

「むぎちゃん」



「むぎちゃん」は無農薬・減化学肥料栽培の原料を低温焙煎した麦茶です。ぜひご飲下下さい。

料として使用しています。粒張りがよく大粒割合高い品種で麦茶に適しています。またこの品種は早生で当地方の梅雨時期前に収穫できるため品質も安定しています。また農家にとっては、大麦収穫後大豆栽培に取り組みやすい品種でもあります。

夏を思わせるこの頃、冷たい麦茶の欲しい季節となりました。今回は麦茶の歴史などについて説明したいと思います。

麦茶の歴史は意外と古く、緑茶の普及する以前の平安時代から貴族が飲用していたとされています。戦国時代には武将たちも好んで飲用し、江戸時代末期になると、町人の気軽な飲み物、お茶代わりとして商品化されました。明治時代には麦湯店、今でいう喫茶店のようなものも流行ると同時に庶民も飲用するようになりました。麦茶は他の飲料と違い、人工的な保存料や甘味料などを使用していません、またタンニンやカフェインといった刺激の強い物質を含まないため、安心してお子さんにあげられる飲料です。麦茶の原料として大部分が大麦で、「むぎちゃん」は6条大麦でシュンライイという品種を原



Let's クッキング  
にら・桜ますのあんかけ

- 材料** 5人分
- ・にら.....300g
  - ・桜ます.....300g
  - ・しょうが.....30g
- あんの材料 ——
- ・片栗粉.....大さじ3
  - ・砂糖.....大さじ6~7
  - ・酒.....大さじ3
  - ・しょうゆ.....大さじ3
  - ・水.....1カップ

- 作り方**
- 経木又はクッキングシートを蒸し器の大きさに切っておく。
- 蒸し器に湯を沸かす。
- にらをゆで、5cmに切りそろえる。
- ますを3枚におろし、経木又はクッキングシートに乗せ、塩少々をふりかけて蒸す。
- あんは、材料を鍋に入れ、へらでよくかき混ぜ、中火からとろ火で練り具合を見ながら、つやが出るまで練る。
- 器に と を盛り合わせ、上から をかけ、おろししょうがを添えて出来上がり。

山形県有機農業者  
協議会総会を終えて  
志藤正一

2009年3月26日、山形県有機農業者協議会の総会が約80名の会員が出席し、山形県自治会館で開催された。2007年3月の結成総会以来3回目となる今回の総会は、山形県の有機農業推進計画がまもなく決定されるという状況での開催となり、副知事も出席して挨拶をした。

2006年12月に成立した有機農業推進法が目指す有機農業は地域の自然や循環機能を生かした、農薬や化学肥料に頼らない資源循環型の農業生産方法や暮らしのあり方を目指すものである。有機JAS制度で認証される有機農産物の生産よりはもう少し広い意味での方向を目指すものといえる。また有機農業推進法は今後、誰でもが容易に有機農産物の生産が出来、購入できることを目指すとしている。そのためにはこれまで有機農業に携わってきた有機農業関係者(民間)

の協力が不可欠であるとしている。有機農業はこれまでどちらかという個の取り組みであったため、隣接農業者との問題や技術的な問題、更に販売や価格の問題など多くのリスクを提携する生産者と消費者で抱えてきたが今後は行政を含めた社会の問題として取り上げられることになる。

庄内協同ファームはこれまで有機農業推進法の成立、県や市町村での推進協議会の設立、行政との連携で進める推進事業に主体的に関わってきたが、今後ともこれらの活動が益々必要とされるであろう。



# ペーパードール 徒然草

芳賀 和子

私個人の趣味の活動紹介を致します。5年前から始めた、押し花の会で、「野の花の会」と言います。

三川町の色々な活動で知り合った友人5人で活動しています。月に2、3度の会は花と向かい合い、友との話らいで疲れも吹き飛ばす楽しい時間となっています。

春、桜、梅菜の花、水仙も二斉に花開く庄内の春。すみれ、わすれな草など野の花も青の絨毯のように小さな花を咲かせてくれています。

季節を追って咲く花を、そつと摘んで押し花にし、栞や葉書、キーホルダー等小さな作品を作り楽しんでいます。今まで、気にも止めず踏みつけていた



畦の花も愛おしく、夫もあの田圃の畦にきれいな花が咲いていたよと教えてくれるようになりました。

あそここのあの花はもう咲いたかしらと、近所の庭の花も気にかかり、時々、ありがたく頂戴しています。

梅と柿の木の間の小さなスペースを自分用の花壇に開墾し、押し花に向く花を何種類か植えています。多年草を主に、雑草に負けて消えては植

え、少しずつ増やしています。私の増やし方は横着方法、啓翁桜は何年前か前に買った枝を一つと花瓶にいれておいたら

根っこが伸びてくれて、一度鉢に移し、しっかりと根が張るのを待って、花壇に植えた物。今はネコヤナギの枝が花瓶の中で根を出しています。ユキヤナギも挑戦中。

只今、農繁期真っ最中で、稲の苗箱をハウスにやつと並べ終わり、本田の耕起作業が始まっています。枝豆も順々に種まきし、畑に植え付けていきます。

暖かくなると、水田の畦畔

や道端に名も知れない野の花が次から次へと咲き出します。

作業の合間に腰を下ろし、野草の花々を眺め、押し花の出来上がりを想像すると、疲れも癒されます。

これから、自然の花々を眺めながら、農作業に精を出していきます。

## 農業ニ知識

### 有機質肥料について

食糧品に対する不安や、未曾有と云われる経済不況の為か、最近では家庭菜園が俄にクローズアップされてきた感があります。近くの書店では、楽しい家庭菜園、簡単な野菜作り等の入門書的な本のコーナーがあったりする程です。そこで今回は有機質肥料について、簡単に触れてみたいと思います。動物や植物の物質、生体由来の原料から製造された肥料を一般的に有機質肥料と呼ぶようです。身近に聞いたことのある原料としては、米糠、鶏糞、牛糞、魚粉、油粕、貝殻、海藻などがそれに当たります。又これらの原料を混ぜ合わせ発酵させる事もあります。一方化学肥料は、製造工程で無機物の原料を工業的に合成して作った肥料になります。この時期農家では田、畑に肥料の散布をしますが、今年はこの有機質肥料への引き合いが多くなっていると業者さんの話です。今度はこの有機質の原料そのものが、将来不足する事になるのでしょうか。



## あとがき

やわらかな春の陽さしを受けて、渴き始めた田畑に吸い寄せられるように作業をする人が集まり始めた、と思う間もなく、一斉に出揃う。いつもと変わらぬ稲作地帯の光景だ。機械が大型化されたこともあって始まったかと思うとあつと間に耕起が済み、代掻が済み、植えたの早苗で平野中が埋めつくされる。種蒔きから田植えが終わるまでわずか40日。この間、濃密なスケジュールで、天気や気温に敏感に対応しながら作業を着実に進めていく。

有機で育苗に取り組むようになって今年で10年目。このころようやく種蒔きが順調に行くようになってホッとしている。温湯消毒の失敗で発芽不良を招いたり、箱詰め済んだ床土に水が浸透してくれなかったり、その度にやり直しをして、再度スタートラインについて。失敗は成功の元、とは言え、短期決戦の中でのやり直しは大変だ。たなあと思い返す。

毎年繰り返し返しのようである、決して繰り返しては、ない、苦い失敗の経験が新しい技術を生んで今がある。今年山形期待の新品種「つや姫」も作付けされ、有機で育てる。どう育つか育てるか、新しい楽しみを持ちながら五月の薫風を浴びて畦に立つ。

(東)

